

個別論文

D. H. ロレンス「牧師の娘」における階級 —— 初期稿「二つの結婚」との比較の観点から ——

石 原 浩 澄

はじめに

リーヴィス(F.R.Leavis)がロレンス(D.H.Lawrence)批評に与えた影響の大きさを否定するものはおそらくないだろう。知性に偏向した近代文明、そしてそこに囚われた人間の空虚さを洞察、批判し、生命そのものの神秘、躍動感を描いた健全な作家というロレンス像は、リーヴィス以後、根強く支持されることとなった。ロレンスのスノビズムを批判するエリオット(T.S.Eliot)に主に反論するかたちで、リーヴィスがその著『小説家 D.H.ロレンス』中の「ロレンスと階級」と題する1章で論じたのは、本稿の対象であるロレンス初期の短編「牧師の娘」(“Daughters of the Vicar”)であった。社会階級の壁を越えた男女の恋愛、というロレンスにはしばしば見られるモチーフを中心に構成されているこの短編の主題をリーヴィスは「階級差に対する生の勝利」(“the triumph over them [class-distinctions] of life”)と呼んだ。¹⁾

一方、リーヴィスのように「階級なき真理(“class-less truth”)」を前面に掲げて論じる立場は、ロレンスをめぐる議論から階級の問題を取り去ってしまう、と批判するのはマーティン(Graham Martin)である。マーティンは「牧師の娘」の結末——すなわち、階級を越えて結婚することを決意したアルフレッド(Alfred Durant)とルイーザ(Louisa Lindley)の二人が、ルイーザの父である牧師のリンドレイ氏(Mr Lindley)に、結婚するなら町から出ていくように告げられる——に言及して、これは「生の勝利」というよりむしろ敗北に近いものだとして述べる。つまり結局二人は、階級の壁が厳然として残る社会から逃亡せざるを得ないのであって、二人の「生」の成就が可能となるのはこのような社会の外側においてのみであるとマーティンは論じる。²⁾

このようなマーティンの読みに直面した時、思い起こされるのは、「牧師の娘」の初期稿である「二つの結婚」(“Two Marriages”)の存在であろう。と言うのも、この

初期稿の結末では、アルフレッドとルイーザは町を去ることなく、そこで結婚後も暮らしているからである。この「二つの結婚」から「牧師の娘」への改稿について論じている論者のひとりにクッシュマン(Keith Cushman)があげられる。クッシュマンの仕事は大まか言って、『プロシア士官』短編集中の各作品の改稿過程に、ロレンスの作家としての成長を跡づけようとするものである。クッシュマンは結論としてはリーヴィスに同意しながらも、初期稿に顕著な特徴である階級問題がしだいに階級超越的な人間関係というヴィジョンの中に包括されていく様を、両稿を比較しながら丁寧に跡づけようとする³⁾。確かに、一見すると、「牧師の娘」では初期稿ほど明確には階級対立や人物の階級意識は描かれていないように思われる。しかし、階級問題が物語の前景から退いていることの意味を、「生の勝利」と単純に受け取ってよいのだろうか、これが本稿の発する問いである。もっともこの問いは、注目されることの比較的小さい「牧師の娘」という短編のみに向けられるべきものではないだろう。本稿では、上記のような議論状況を踏まえ、ロレンスの諸テキストは、強烈な個性を備えた個人が、彼／彼女を束縛する諸々の社会的規範を超克する様を描いたものであるとする解釈、ひいては、生命の作家としての健全なロレンス像、を再考する契機として、「牧師の娘」を論じてゆこうと思う。

I

クッシュマンが両稿を比較する中で読み取っているのは、「牧師の娘」においては、階級の違いがアルフレッドとルイーザにとって大きな障害となくなっているということ、また、二人が単なる「階級的主体("class identity")」を超えて結び付く⁴⁾、ということだ。そして、こうした変化はクッシュマンの目には作家の「成長」として映るのである。

「二つの結婚」から「牧師の娘」への改稿が持つ重要性については、カルニンス(Mara Kalnins)もロレンスの芸術手法の向上という観点から論じている。カルニンスは、後者の方が「人物の理解においても心理的により深遠である」と述べ、ロレンスの関心はあくまで「人物たちの階級をこえた根本的な人間性("the fundamental classless humanity of his people")」であると言う⁵⁾。このような解釈からもうかがえるように、「牧師の娘」への改稿の軌跡は、ロレンスの「生の哲学」の勝利を表わしているようにも思われる。

だがはたしてロレンスは積極的にこのような書き換えに臨んだのであろうか。前述

の問いはこう置き換えることもできよう。

この改稿について考えるにあたって、まず初期稿である「二つの結婚」を見ておく必要があるだろう。「牧師の娘」と比べた時、物語のプロットそのものに大きな変化はないが、結末の違いが最も注意をひく。「二つの結婚」では最終的にアルフレッドとルイーザは結婚し、オルデカー (Aldecar) [「牧師の娘」ではオルデクロス (Aldecross) に変更] の町で生活していることは前述した。

別の特徴は、作品のテーマにかかわるのだが、階級の問題がより鮮明に描かれているという点であろう。二人の主人公の階級差がより明確に前面に出ているのが読み取れる。仲間の炭坑夫たちと同じように方言を使うアルフレッドが2ページにわたり描かれているが⁶¹、この部分は「牧師の娘」では見られなくなる。またルイーザの美しさに心を奪われていても、アルフレッドは「教育の面でも思考においても彼女は自分よりはるかに上流で、手の届かない存在なのだ」(234) と思っているし、牧師館を訪ねた時に「彼ら [リンドレイ家] の〈上流の〉世界へは決して入っていくことはできない」(237) と考えるように、アルフレッドの明確な下層階級意識が描かれる場面は数多い。階級差はルイーザの側からも描かれる。細かい部分をあげるならば、「牧師の娘」では、炭坑夫の娘たちにピアノを教えている彼女だが、「二つの結婚」ではわざわざ「炭坑夫の娘たちを除いたすべて」(213-214) にピアノレッスンをしていることになっている。

手法の違いも特徴のひとつとしてあげられる。この点はカルニンスやクッシュマンに詳しい。カルニンスの言葉を借りれば、「二つの結婚」での「単純な描写 ("simple description") は「牧師の娘」において「より深い意識」 ("deeper awareness") の描写へと変化しているのだ⁷¹。特に『虹』 (*The Rainbow*, 1915) 以降のロレンスに特徴的な、自由間接話法を用いた心理描写や、言語による意識 (verbal consciousness) を越えた深層の意識を象徴的に描く手法は初期稿ではさほど顕著ではない。

II

このような特徴をもつ「二つの結婚」をなぜロレンスは書き換えたのか。この作品は単に荒っぽく書いた初期原稿で、改稿は当然であった、という推測も可能だろうが、ロレンスがアメリカの雑誌『センチュリー』 (*Century*) 誌上での掲載を見込んで原稿をエドワード・ガーネット (Edward Garnett) 宛に送っている⁸¹ という事実からもわかるように、改稿は下書きを消書しただけであるとみなすことはできない。

ここで本作品の出版にかかわる事情に目を向けたい。「二つの結婚」ははじめ1911年7月に書かれている⁹⁾。ロレンスはその修正稿をその年の11月ガーネットに送るが、結局『センチュリー』誌に拒否される。(この版がわれわれが本稿で検討している「二つの結婚」であり、ロレンスの死後1934年に *Time and Tide* 誌に掲載されたものである。)¹⁰⁾ この作品はその後数回の大幅な修正を経て、1914年の『プロシア士官』短編集の中に「牧師の娘」としておさめられた。「二つの結婚」から「牧師の娘」への改稿を考察する際に、『センチュリー』誌に「二つの結婚」の掲載を拒否されたという出来事は無視できない。ロレンスはガーネット宛の手紙で「アメリカ人はわたしたちが思っていたとおり馬鹿です」¹¹⁾と吐き捨てるように書いているが、彼が——もっともロレンスは再び同誌に原稿を送ることはしなかったが——雑誌の編集者や出版業界の反応を意識して改稿したことは、あくまで想像の域を出るものではないが、大いに考えられることである。彼らの、および読者層の意向に沿うかたちで、改稿作業がすすめられたとするならば、このことは改稿の理由としてはもとより、「牧師の娘」に与えた影響として重要なことである。と言うのも、出版、流通業界を支配する階級、及び主要な読者層を形成する階級の反応を作者が意識したということと¹²⁾、階級差を超越した恋愛という幾分センセーショナルな主題を強調したトーンが改稿によって低下するという事実との因果関係を推し量ることは可能だからである。このことは、作品の中で提起された問題そのものがはらむ複雑さ、及びその解決の困難さを示唆することにもなる。

やはり書き換えの最大の理由はロレンス自身が感じた「二つの結婚」に対する不満であると考えられるべきであろう。この点を検討するには上にも少し見たように、「牧師の娘」では薄れている「二つの結婚」の特徴に着目するのが妥当かと思える。それはあえて一言で言うなら、階級を超越した男女の恋愛を客観的に描くという主題そのものである。繰り返しになるが、アルフレッドは自分がルイーザよりも下の階級の出であることを強く認識している。このことを意識してルイーザに対する時に見せる彼の自信のなさは顕著である。牧師館に行った彼は「大きな家を見て恥ずかしく思い、卑しめられたように感じた。再び自分が労働者階級の、下品な一般大衆のひとりであるかのように感じ」(234)るのである。アルフレッドにはリンドレイ家の人々は「炭坑夫の世界とは違う別のおほろげな世界に生きている」(237)ように思える。次の引用は、アルフレッドが母を亡くした翌週の日曜日に、教会でルイーザが彼を家に招待する場面である。

"Well," said Durant awkwardly. "I'll come if you want me."

To himself he said "She feels sorry for me." And he was offended.

"You will come tomorrow evening then, about half past six." He went: he played his flute well enough. But Miss Mary, calling all her haughtiness to order, disapproved of him in the drawing room. He disapproved himself. They had him stay to dinner, a paltry but genteel meal. They were all very nice. Mrs Lindley called him 'young man.'

"Will you sit here, young man?"

Mr Lindley kept a special tone for him, different from that he used to anyone else, even the maid: a kind of brother-in-Christ but er — you know your place, don't you! Durant was humiliated and angry. (238)

ここには難解な言語使用や、ロレンスに特徴的な「血」による認識、「もうひとつの自己」¹³⁾を描くような言葉——つまり、クッシュマンをはじめ批評家が指摘する、「牧師の娘」に特徴的な言語——もない。人物の心理状態も極めて簡潔に、写實的に描かれている。それでいてアルフレッドの微妙な階級意識、自信のなさがよく伝わってくる場面である。このように自信なげなアルフレッドとルイーザの結婚というのはやはり幾分唐突であり、一気に階級の壁を超越してしまったような印象をまぬがれない。¹⁴⁾

ロレンスはこのような解決方法に無理を感じたのではあるまいか。出身階級の違いという客観的事実を背負ったままで、二人の男女を結び付けるということを十分な説得力をもって描けていないと思ったのではないか。「二つの結婚」の書き換えには、そのテーマそのものがかかえる困難さがあったと考えてよいであろう。階級超越的な男女の恋愛を写實的、客観的に提示することがロレンスにはできなかったのだ。

III

そこでロレンスが改稿に際して採った方法は、描写の焦点を移行させるということであった。つまり、「牧師の娘」では、階級差という客観状況よりも、個人の資質にかかわる部分がより強調され、問題の本質が抽象化されるのである。「牧師の娘」でアルフレッドに付与される特質を少し見てみよう。ここでもアルフレッドとルイーザの出身階級の客観状況は変わっていない。いわばアルフレッドと対極にあるマッシー(Edward Massey)は、ルイーザの姉メアリー(Mary)の結婚相手となるオックス

フォード出の牧師である。彼は、「哲学的思考("philosophical mind")」(48)の持ち主で、「人間的感情("human feelings")」を欠き、「ふつうの人間関係("normal human relationship")」(50)ができない。intellect, mathematical, abstract, non-human, coldなどが彼を形容する語として用いられる。ルイーザはそんなマッシーが近くに寄ってきそうにもなるなら「彼女の血が沸き上がり、その小男を抹消してしまうだろうと思うとうれしくなるのだった」(56)。姉のメアリーはマッシーと結婚するには「自分の肉体を無視しなければならなかった("She had got rid of her body")」のである(56)。このマッシーとは対照的に、アルフレッドは「生("life")」のみなぎる人物として描かれている。肉体と精神を対照的に描き、生を肉体の側に結びつけるのはロレンスの常套手段である。ルイーザは、アルフレッドの肉体を強く意識する。彼の声は「彼女を貫く炎("a flame through her")」(53)のようであり、彼の容姿は「まっすぐで美しい生の噴出("a straight, fine jet of life")」(53)なのである。両稿におけるひとつの場面を比較してみたい。デュラント夫人が病床に伏しているため、彼女にたのまれて、仕事から帰ったアルフレッドの背中をかわりにルイーザが洗う場面である。第1の引用は「二つの結婚」からのもの、次は「牧師の娘」からのものである。

She scarcely considered what she was going to do. . . . Louisa watched him. It seemed a strange adventure to her, that she should wash the shoulders of a young man. . . . His skin was beautifully white and unblemished, of an opaque, solid whiteness. Miss Louisa flushed to the roots of her hair as she sponged him and saw that his neck and ears had grown flaming red. (232)

Alter all, there was a difference between her and the common people. . . . His skin was beautifully white and unblemished, of an opaque, solid whiteness. Gradually Louisa saw it: this also was what he was. It fascinated her. Her feeling of separateness passed away: she ceased to draw back from contact with him and his mother. There was this living centre. Her heart ran hot. She had reached some goal in this beautiful, clear, male body. She loved him in a white, impersonal heat. But the sun-burnt, reddish neck and ears: they were more personal, more curious. A tenderness rose in her, she loved even his queer ears. A person — an intimate being he was to her. . . . She had only seen one human being in her life — and that was Mary. All the

rest were strangers. Now her soul was going to open, she was going to see another. She felt strange and pregnant. (72-73)

どちらの引用でもルイーザはアルフレッドの美しい肉体を見て感銘を受けているが、表現方法、使用言語の顕著な違いは明らかであろう。前者の比較的淡々として客観的な描写に比べ、後者はロレンス的な語句の使い方に満ちている。晩年の『チャタレイ卿夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*)におけるコニー(Connie Chatterley)——つまり、彼女がメラーズ(Oliver Mellors)が体を洗っている様子を見て鮮烈な印象を受ける場面——を思わせるような、啓示を受けたようなルイーザの姿が後者の引用には描かれている。彼女はアルフレッドの肉体に「生を中心("living centre")」を見てとり、「心が熱くなり("Her heart ran hot")」、「やさしさが沸き上がる("A tenderness rose in her")」。そしてあたかも「妊娠した("pregnant")」かのように感じる。彼女はそれまでの単なる一炭坑夫ではない、もうひとりのアルフレッドを発見する("this also was what he was")。そしてルイーザはこのアルフレッドのもつ「生を中心」たる肉体美の中に、彼女が直前まで意識していた階級の違いを超越する根拠を見出ししているのである("Her feeling of separateness passed away")。読者はロレンスの語彙に満ちた、ルイーザのこうしたある種超越的、独特な認識をさほど奇異には思わないだろう。先に見た姉夫婦の結婚などを対照的に描きながら、ルイーザは生命のあたたかさにひかれるであろうことを、それまでに語り手は周到に提示してきているからである。ゆえに、二人の結び付きという点では、「牧師の娘」のほうがはるかに説得力をもって描ききれている。「二つの結婚」における二人の結婚は少々唐突に思えると上で述べたが、「牧師の娘」では、ルイーザがアルフレッドにひかれる理由が、アルフレッドの「生」の魅力として提示されているので、二人が結び付くことは納得できるのである。

だが、この説得力を獲得するためにロレンスが採った手段は、社会構造としての階級問題という核心の〈ずらし〉であり、焦点の巧みな移行である、と読むことは十分可能なのである。こうした焦点の移行は、特に作品の筆致において確かにロレンスの作家としての「成長」であり、「成熟」を示すものであろう。しかし単純にそれを「階級差を超越した生の勝利」と呼べるのであろうか。こう疑問を抱く最大の理由は「牧師の娘」のテキストには、階級の壁を乗り越えようとするアルフレッドとルイーザにまつわる根源的人間関係、生命の謳歌という旋律に混じって、厳しい現実の痕跡がかいま見られるように思えるからである。アルフレッドはルイーザとの結婚を考え、彼女をほとんど無意識の状態で腕に抱いた時には確かに「もう彼女と別れること

はない」(83)と思い、彼女との結婚を運命のようなものと考えているが、彼の階級意識が完全に払拭されることはない。アルフレッドには、多少戯画化されたマッシーに代表される知的上流階級の者にはない、生命力が付与されている。しかしそのことを語り、コメントするのは語り手であり、また、彼の生命力を直観的に感知するのはルイーザである。われわれ読者はアルフレッド自身が階級を超越する生命力を持ち得ているということは知りえないのだ。それどころか、牧師館に求婚に行くアルフレッドは、リンドレイ氏を前にして「再び上流の者の前に出た水夫のように」(84)感じているし、家の不名誉とならぬように町を出ていくように言われた彼は、「それが一番よいでしょう」(86)と答え、「もうそれ以上めんどろがなくなつてうれしかった」(86)と思っている。

ロレンスは、ルイーザの変容、つまり、階級という壁を上から下へ越えていくことを彼独特の筆致で、たくみに描いた。しかしその逆はそれほど容易に描いているわけではない。下から上への移行ははるかに微妙な様相を呈している。だがそれだけにむしろ作品はリアリティを獲得しているとも言えるだろう。

「牧師の娘」におけるアルフレッドはある意味で「格上げ」されている。クッシュマンはそれをアルフレッドの「奇妙な資格」としながらも、後の結婚のためにルイーザとの釣り合いをとるという意味で、許可を与えられているのではないかと述べている¹⁹⁾。アルフレッドは、兵役についていたころに得たとされる教養のために、炭坑夫仲間のあいだにいて違和感を覚えるのである。

He read books and began to hold fixed ideas which he got from the Febians. He played his piccolo, and was considered an expert. But at the bottom of his soul was always this canker of shame and incompleteness: he was miserable beneath all his healthy cheerfulness, he was uneasy and felt despicable among all his confidence and superiority of ideas. He would have changed with any mere brute, just to be free of himself, to be free of this shame of self-consciousness. He saw some collier lurching straight forward without misgiving, pursuing his own satisfactions, and he envied him. Anything, he would have given anything for this spontaneity and this blind stupidity which went to its own satisfaction direct. (68)

アルフレッドは仲間の中に「自発性("spontaneity")」、 「盲目的愚かさ("blind

stupidity"」を確認し、自分と他の坑夫たちとは明らかに違うと思っている。そしてまさにその理由のために苦しんでいる。「格上げ」のための条件を付与されているために彼は仲間のあいだで疎外感を味わうという苦悩を経験している。アルフレッドが味わう二重の苦悩——リンドレイ家に代表される人々にたいする消えることのない劣等意識と、自らの出身階級からの疎外感——は、とりわけ下から上へと階級の梯子を登っていくことに伴う困難を物語っているのだ。アルフレッドとルイーザを結びつけるために、障害を緩和するためになされた、アルフレッドの「知的格上げ」は、彼をある意味で脱階級化させ、むしろ彼に別種の苦境を味あわせるように作用している¹⁶⁾。

IV

ここで少し視点を変えてロレンスの階級に対する一般的な言及のいくつかを見ておくことは無駄ではあるまい。小説以外でロレンスが明確に階級に関して意見を述べている部分は決して多いわけではなく、ノン・フィクション的著述に限れば、晩年になってから自らの過去を回想するかたちで意見を表明しているくらいである。1927年に書かれた¹⁷⁾「スケッチ風自伝」("Autobiographical Sketch")の中で彼は次のように語っている。

Class makes a gulf, across which all the best human flow is lost. . . . As a man from the working class, I feel that the middle class cut off some of my vital vibration when I am with them. I admit them charming and educated and good people often enough. But they just stop some part of me from working. Some part has to be left out. ¹⁸⁾

このような著述に基づいてロレンスの中産階級批判論を展開することは格別斬新なことではないだろう。彼の中産階級、および、中産階級的価値観についての批判は、これまでも諸々の作品研究とからめて十分に論じられてきた。しかしここであえて注目したいのは彼の批判の仕方は、内面的、観念的で、幾分抽象的でさえあるという点である。このことはロレンス自身の階級問題に対する独自の姿勢なり、態度なりを示していると言えよう。と同時に、中産階級の人々といると「生命力の震動が断ち切られる」ように感じる、などの言い方は、非常にロレンス的ではあっても、極めて観念的な批判であるとも指摘できる。ある意味で、読む者は、ロレンス独自のレトリックに

煙にまかれているのかもしれない。自伝的要素の濃い作品と言われる『息子と恋人』(*Sons and Lovers*)の中でロレンスはポール・モレル(Paul Morel)に似たような理論化をさせている。

"—the difference between people isn't in their class, but in themselves. —Only from the middle classes, one gets ideas, and from the common people—life itself, warmth.¹⁹⁾

中産階級＝「観念("ideas")」、労働者階級(common people)＝「生("life")」、「暖かさ("warmth")」というポールの解釈は、一見表層的階級構造にとらわれない根源的な洞察のように見えて、その実、社会的現象、現実を極めて観念的に認識しているのである。前掲のエッセイや、ポールの言葉などには、表層的階級問題など超越したかのような、一種の自信のようなものさえ伺える。

一方、次のような著述から感じとられるニュアンスは多少違うものだ。

"We climbed the steep ascent to heaven
Through peril, toil and pain.
O God to us may strength be given
To scramble back again."

O I was born low and inferior
but shining up beyond
I saw the whole superior
world shine like the promised land.

So up I started climbing
to join the folks on high,
but when at last I got there
I had to sit down and cry.

For it wasn't a bit superior,
it was only affected and mean;

though the house had a fine interior
the people were never in.

I mean, they were never entirely
there when you talked to them;
away in some private cupboard
some small voice went: *Ahem!*

Ahem! they went. *This fellow*
is a little too open for me;
with such people one has to be careful
though, of course, we can't let him see! — ²⁰⁾

この“The Saddest Day”をはじめ、Pansies 詩集中の“Up He Goes!” “A Rise in the World” “Climbing Up” など一連の詩には、社会的に上昇するという経験が詩の語り手にとっていかに苦痛に満ちた経験であったかが刻み込まれている²¹⁾。この詩の「私 (“I”)」は社会的に「低く (“low and inferior”)」生まれ、「上流の世界 (“superior world”)」を目指して進む。その経験は「危機、苦勞、苦痛 (“peril, toil and pain”)」に満ちている。上まで登りつめても、そこで「私」が見い出すのは、上流社会との間に横たわる埋め難い絶対的差異であり、断絶である。この詩は、ある体験にともなう率直な感情、葛藤の記録である。

ロレンスはまた、「スケッチ風自伝」という同じタイトルを冠された前掲とは別の1928年に書かれた²²⁾ エッセイの中で次のようにも述べている。

Next two years in Nottingham University, at first quite happy, then utterly bored. — Again the same feeling of boredom with the middle classes, and recoiled away from them instead of moving towards them and rising in the world. . . . In 1915 *The Rainbow* was suppressed for immorality — and the sense of detachment from the bourgeois world, the world which controls press, publication and all, became almost complete. He [i.e. D.H.Lawrence] had no interest in it, no desire to be at one with it. Anyhow the suppression of *The Rainbow* had proved it impossible. Henceforth he put away any idea of

"success," of succeeding with the bourgeois public, and stayed apart. ²³⁷

ここでもロレンスは、自らの経験を率直に語っている。感情は比較的抑えられており、特に作家という立場にいて、中産階級社会から締め出されたという感想を持ったことが語られている。

筆者には、上述したロレンスの中産階級に対する観念的批判と、上記の詩や回想記に見られるような絶対的な差異意識をとどめている階級問題に関する記述は、両者とも一見似たようなアンチ中産階級発言でありながら、その間には微妙なズレがあるように思えてならない。だがこのズレにこそ、この問題に関するロレンス流の解釈の軌跡を読み取ることができるのではないか。つまり、ロレンスにおいては経験が、中立的、写實的に記録される一方で、それが反省された時、経験の核心は個人の内面に求められ、観念的に提示されるのである。そしてこの移行に、問題に対するロレンスの苦渋、ひいては問題そのものがはらむ解決の困難さを認めることができるのである。

ここで再び「牧師の娘」に目を向けるならば、この両者がテキストの中に混在していることが見えてくるであろう。リンドレイ夫人についても、彼女が「病弱 ("invalid")」となってしまうのは、経済的に貧しくとも、「上流」であるということにこだわる彼女の姿勢が原因であるように描かれている(41)。また、どちらも上ですでに触れたことであるが、上流階級をある点で代表するマッシーの描写の仕方と、牧師館でリンドレイ一家を前にしたアルフレッドの苦境の描き方とは、本質において異なっている。次の引用に端的に示されるように、ロレンスは、知的で理性的なマッシーの肉体的貧弱さを暴露するにとどまらず、主な批判の矛先を彼の内面に向けているのである。

He had no normal powers of perception. They soon saw that he lacked the full range of human feelings, had rather a strong, philosophical mind, from which he lived. His body was almost unthinkable, in intellect he was something definite. The conversation at once took a balanced, abstract tone when he participated. There was no spontaneous exclamation, no violent assertion or expression of personal conviction, but all cold, reasonable assertion. (48)

批判的に語られるマッシーの特徴は、彼の「知性」("intellect")、「抽象性」("abstract")であり、「自発性」("spontaneous")のなさ、「非人間的意志」

（“non-human will”）(51)などである。マッシーという人物を内面的に、あるいは観念的にとらえたこのような語り手のコメントは、求婚に行った牧師館の場面でアルフレッドが味わう孤立感を劇的に提示する語り口とは異質のものである。そこでアルフレッドが苦悩するのは、彼がリンドレイ家の人々に「知性」や「抽象性」を感じているからだとは思われない。アルフレッドの苦悩は、『息子と恋人』のポールが理論化したような観念的レベルのものではなく、上記詩人に似て、彼が牧師館の人々との間に、断絶や圧倒的な差異を感じていることに端を発しているからに違いないのだ。

おわりに

ロレンスは「二つの結婚」で追求した社会階級を超越した恋愛という主題を、「牧師の娘」において初期稿に等しく、写實的、客観的には提示しなかった。両稿の違い、および特徴に着目するとき、「二つの結婚」から「牧師の娘」への進展には、今世紀初頭におけるオリジナルな作家としてのロレンスの成長とともに、ロレンスの戦略の形跡を見て取ることが可能であろう。この戦略のもとで、登場する人物は、階級という背景と結びついた社会的存在であることから、社会的束縛から解放されたかのように、観念的な形容語により、独特な生命力を付与された自律的存在へとずらされる。そしてこの「ずれ」・移行は「生の勝利」という解釈を誘発する一方で、主題そのものがはらむ現実問題としての困難さも同時にわれわれに示している。階級差より重要で、より根本的な人間関係を追求することと、階級の問題を棚上げ状態にした解決策を提示することとは、表層ではいかに類似していても、決して同じものではない。「二つの結婚」の改訂稿として見た場合の「牧師の娘」のテキストは、厳しい現実を正視していた作家の姿を浮き彫りにするのである。階級を超越した生命の作家という側面のみではないロレンス像を、「牧師の娘」のテキストは示唆している。また、階級の超克というユートピア的安易な解決にのみ傾倒しておらず、苦悩の痕跡をテキストがとどめているからこそ、読者はロレンスの人間観察の鋭さを再評価することも可能となるだろう。

注

- 1) F.R. Leavis, *D. H. Lawrence: Novelist* (1955; Harmondsworth: Penguin Books, 1964), p.86. その他、メアリー・イーグルトン、ピアスもこの作品に、階級に勝利することを願ったロレンスの姿を読みとっている。Mary Eagleton and David Pierce, *Attitudes to Class in the English Novel* (London: Thames and Hudson, 1979), p.106を参照。
- 2) Graham Martin, "D.H. Lawrence and Class" in Douglas Jefferson and Graham Martin eds. *The Uses of Fiction* (Milton Keynes: The Open Univ. Press, 1982), pp.83-97.
- 3) Keith Cushman, *D. H. Lawrence at Work* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1978), pp.77-115.
- 4) 同上, p.89.
- 5) Mara Kalnins, "D.H. Lawrence's 'Two Marriages' and 'Daughters of the Vicar'" in *ARIEL* 7 (1976), pp.32-49. その他の言及としては、たとえばハリスも、クッシュマン、カルニンスの論の流れに沿うかたちで、「ロレンスは結局、階級を主要な問題としては扱わず、代わりに登場人物の精神に深く入りこんだ葛藤に焦点をあてる」と述べている。Janice Hubbard Harris, *The Short Fiction of D. H. Lawrence* (New Brunswick, New Jersey: Rutgers Univ. Press, 1984), p.55参照。
- 6) D.H. Lawrence, *The Prussian Officer and Other Stories* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1983), pp.227-228. 以下、「二つの結婚」及び「牧師の娘」からの引用はこの版により、引用ページを各引用の最後に記す。
- 7) Kalnins, p.40.
- 8) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol.1, ed. by James T. Boulton (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1979), p.301.
- 9) 同上, p.288.
- 10) "Introduction" in *The Prussian Officer and Other Stories*, pp.xl-xli.
- 11) *The Letters*, Vol.I, p.343.
- 12) 後述するエッセイのなかでもロレンスは、出版、印刷業界を支配する階級から拒絶されたという思いを、回想として語っている。本稿 p.11 を参照。
- 13) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol.II, ed. by George J. Zytaruk and James T. Boulton (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1981), p.183.
- 14) 求婚の場面における説得力不足を指摘しているものとしては、Brian H. Finney, "D. H. Lawrence's Progress to Maturity: From Holograph Manuscript to Final Publication of *The Prussian Officer and Other Stories* in *Studies in Bibliography* ed. by Fredson Bowers, Vol. 28 (1975), p.330 などがある。
- 15) Cushman, pp.91-92.
- 16) 前作『息子と恋人』(*Sons and Lovers*, 1913)において、労働者階級からの脱出をはかるポール(Paul Morel)が、階級のはざまで味わう苦悩と、アルフレッドのそのの類似を指摘することができよう。詳しくは、拙稿「D. H. ロレンス『息子と恋人』論——教養小説としての再考の試み——」(『立命館言語文化研究』7巻1号, 1995年), pp.49-87を参

照。

- 17) Keith Sagar, *D. H. Lawrence: A Calendar of His Works* (Manchester: Manchester Univ. Press, 1979), p.157.
- 18) D.H.Lawrence, *Phoenix II* (1968; Harmondsworth: Penguin Books, 1978), p.595.
- 19) D.H.Lawrence, *Sons and Lovers* (1913; Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1992), p.298.
- 20) *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, ed. by Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts (1964; Harmondsworth: Penguin Books, 1977), p.554. ここには, "The Saddest Day" 全10連中ではじめの6連のみを引用した。
- 21) オールデンは, これらの詩を例示しながら, ロレンスにとって社会的上昇という経験がいかに苦痛をともなうものであったかを述べ, ロレンスは彼自身の中にある労働者と中産階級との葛藤を和解できなかったのだと結論している。Patricia Alden, *Social Mobility in the English Bildungsroman* (Ann Arbor, Michigan: UMI Research Press, 1986), p.97.
- 22) Sagar, p.174.
- 23) D.H.Lawrence, *Phoenix II*, pp.300, 302.